

## 日本宗教とイスラームのパンデミック認識…禍難を乗り越える手段として

小川 忠

はじめに

人類は歴史において幾度もパンデミック（感染症の世界的流行）を経験し、おびただしい命を失ってきた。現在進行中の新型コロナウイルス危機がいつ終息するのかは予測できないが、ひとつだけ確実に言えるのは、いずれこの危機も過ぎ去るということだ。歴史において終わらなかつたパンデミックはない。この危機が去った後に、世界にはどのような風景が広がっているのか。世界中の識者が議論を始めている。

目下のところ最も関心を集めているのは、パンデミックが経済に与える影響であろう。パンデミックはインフォーマル・セクターや社会的弱者を直撃する。企業にとつての懸念は、「世界的な契機後退の長期化」「企業倒産」「産業界の再編」「サプライ・

チェーンの寸断」「失業率上昇」「保護主義の拡大」といった点である。世界経済フォーラムが二〇二〇年五月に発表した報告書によれば、「世界経済総生産の三％減少」「世界貿易量の一三～三二％縮小」「海外直接投資の三〇～四〇％減少」「五億人が貧困層に転落」が今後起こりうる事態、と予測されている<sup>1)</sup>。

すさまじい数字で、まさに世界経済は大恐慌以来の危機に直面していることを示す。大恐慌は各国政府を保護主義に奔らせ、全体主義国家の台頭を招き、やがて世界は第二次世界大戦になだれこんでいった。現在の国際協調体制は、辛酸をなめつくした世界が再び戦争を起こさないために、大恐慌以降の内向きナショナリズムに対する反省の上に、構築した秩序である。それが今、根底のところから揺らいでいる。

さらに政治においては、国際協調に背を向ける自国第一主義、排外主義、権威主義への傾斜現象が世界各地で見られる。パンデ

ミックがエスノナシヨナリズム、ポピュリズム、権威主義による人権抑圧の口実になることへの危惧を、グテーレス国連事務総長が述べたのは、国際社会の深刻な危機感の表れであろう。<sup>2)</sup>

パンデミックは、経済、政治にとどまらず社会文化面にも大きな衝撃を与える。教育もろかり。パンデミックの教育への影響について、ユネスコが各国政府から情報を収集している。このユネスコ統計によれば、二〇二〇年一月一日時点で二九か国において学級閉鎖の措置がとられ、全学習者の一八%、三億一七八万人の学習者に影響が出ている。同年六月時点では一〇四カ国で学級が閉鎖され、影響を受ける学習者は一〇億人を超えていた。<sup>3)</sup>

ウィルス危機は、現代人の心のあり様を揺すぶる。寄稿者は、これからの世界において、二〇世紀後半に既が始まっていた「宗教の復権」現象が世界各地で加速するのではないかと予想している。国民の多くが「無宗教」という自己認識を有し、世俗主義的な日本社会においても、その兆候が見られる。

長年日本の論壇の中心にいて二〇二〇年八月一九日に世を去った評論家の山崎正和は、亡くなる直前の五月に脱稿した論考において、二〇二〇年ウィルス危機は「近代人の秘められた傲慢に冷や水を浴びせ、人類の過去の文明、都市文明発祥以来の歴史への復帰を促す<sup>4)</sup>」と予言的な言葉を遺した。

疫病の流行という目に見えぬ恐怖に関して、死が日常のなかにあり、それに耐える感性を備えていた中世人より、「長らく死から逃避し、死から目をそむける習慣を養ってきた」現代人の方が過酷、と山崎は述べ、「今回の経験が伝統的な日本の世界観、現実を無常と見る感受性の復活に繋がってほしい」と現代日本人への願いを語っている。<sup>5)</sup>

ここで山崎は、無常感という日本の伝統的価値観を「感傷的な虚無主義」ではなく、「現実変革の具体的な知恵と技を発揮しながら、にもかかわらずそれを無常の営み、いずれは塵埃に返るつかの間の達成にすぎないと見明きらめる醒めた感受性」と表現している。<sup>6)</sup>

これを言い換えれば、パンデミック禍の「不安の時代」において、日本の伝統的な死生観は、経済や医学が提供しえない「安心」を現代人に提供し近代文明を補充しうる存在、となる。つまり、宗教的感性は、ウィルスとの戦いにおいて近代と共闘し、戦いに勝利するための心の鎧、と山崎は見ているのである。

他方、宗教は近代の基本原理である合理主義を否定し、非科学的あるいは反科学的行動を信徒にとらせるがゆえに、ウィルスとの戦いにおいて足かせになる、という見方もある。三密状態になりやすいキリスト教やイスラーム教の集団礼拝という信仰形態は

クラスター感染の原因となることが懸念され、韓国の教会やマレーシアのモスクで実際に発生したクラスター感染報道に接すると、宗教の非合理性が疫病に対する社会の耐久力を弱めているようにも見える。

本稿では、宗教が今日のパンデミックをどのように捉え、意味づけをしているのか、日本とイスラームの事例を参照しつつ考察し、禍難を乗り越える手段としての宗教の機能について論じたい。そのまゝに、なぜイスラームを取り上げるとかという点に言及しておきたい。

ユダヤ教・キリスト教・イスラーム教は対立の歴史もあるが、同じ起源を有し、類似性も多く一つの宗教群として「アブラハムの宗教」と総称される。他方、日本はイスラーム世界との接触機会が近代以前は少なく、イスラーム教は日本にとつてなじみの薄い宗教だった。また一神教のイスラーム教は、多神教の神道・日本仏教と全く異なる、共通性のない宗教と一般に考えられている。しかし、ウイルス危機をめぐる両者の言説を検討してみると、意外なことに一定の類似性、共通性が認められる。異なる、接触のない二つの宗教であるにもかかわらず、危機について類似の言説が語られているとしたら、その意味するものは何か。日本宗教とイスラームの言説を比較検討することによって、教義や構造の

違いを超えた、宗教一般が内包する社会的機能の特性を抽出しようのである。

さらに日本社会が有するイスラームに関するステレオタイプ・イメージを解体し、この世界宗教をより多面的に理解する契機ともなるだろう。

## 一 日本の宗教はパンデミックをどう語っているか

まず日本の宗教は、パンデミックをどう捉えているのだろうか。この問いについて、宗教情報センターの藤山みどり研究員が国内の宗教団体からの声明、指導者の信者向けメッセージを分析し、その多様な言説を以下の通り整理して提示しており、日本宗教のパンデミック言説全体を掴むのに有益である。<sup>7)</sup>

### ■ 新型コロナウイルスをどう捉えるのか

「天譴あるいは天意（神意・仏意）」「自らを振り返る時」「日常のありがたさに気づく」「人類が丸となるとき」

### ■ 新型コロナウイルス流行下に、どう対処すべきか

「共に支え合う、共に生きる、互いを思いやる」「利他の精神、菩薩の心」「釈迦、曹洞宗の祖師ならば、どう説くか」

■ 言葉では伝わりにくい宗教者ならではの新型コロナウイルスへの対処法

「座禪、唱題行、信仰・信頼」「祈り」

■ これからの宗教のあり方

「祈り」とエビデンス」「声明やメッセージでは伝わらないもの」

藤山の分類のなから、特に重要と思われる点について焦点をあてたい。「新型コロナウイルスをどう捉えるのか」に関し、天譴論あるいは天罰論、天意論は大規模な自然災害やパンデミックが発生した時に世界各地で語られる言説である。日本でも「新型コロナウイルスの出現は、自然破壊を続ける人類に対する神の怒り」「地球温暖化を招いた大量生産や大量消費というライフスタイルを見直すとき」というメッセージを、神道系、仏教系宗教指導者が信者に向けて発している。

天譴論とあわせて語られる傾向にあるのが、善悪二元論的世界観に基づく邪悪からの攻撃、陰謀説である。「幸福の科学」は、新型コロナウイルスを中国、武漢の生物兵器研究所から出た生物兵器で、この時期に拡大したのは、宗教を敵視する共產主義中国の人権弾圧に対する神の警告、と説明しており、天譴論と陰謀説

がミックスされた独特の解釈が施されている。

天譴論とは違った捉え方で新型コロナウイルス自体を「人類共通の敵」と見立て、宗教の違いを超えて団結すべきという呼びかけも様々な宗派に見られる。例えば日蓮宗、臨済宗の宗教指導者は以下のメッセージを発している。

「この目に見えない恐怖との戦いは、私達人類に課せられた試練であります。国や人種といった境界を越え、今こそ一丸となる時です。私達は一人ひとり異なる存在ではありませんが、心を同じくすることで必ずやこの難局を乗り越えることができますはずです。(中略)皆様が持つ淨い心を以て、他者に思いを寄せ、冷静に適切な行動を心掛けましょう。これが人々を、延いては社会全体を救う一歩へと繋がります。」<sup>9)</sup>

(日蓮宗・中川法政宗務総長)

「戦争や紛争などの争いばかりを繰り返してきた人類が、今この時に、争いごとをやめ、お互いが手を取り合い、智慧を出し合い、この難局を地球レベルで協力して乗り切り、未来に続く真の人類のあり方を築く、その機会ととらえてまいりたいと存じます。」<sup>10)</sup>(臨済宗妙心寺派・小倉宗俊管長 動画)

「新型コロナウイルスにどう対応するか」という点に関しては、医学という近代科学の見解に対立することなく、宗祖の教えや聖典解釈を科学に寄り添わせ、宗教と科学の共存を図る、というのが大方の日本の宗教界の立場である。浄土真宗本願寺派は「コロナらしい時はお医者様、不安になる時は不安になる、『そのまま救う』の弥陀の慈悲」というメッセージポスターを作成し、ウェブサイトに掲示した解説で、「事は医学の領域ですから、まずは医師の科学的判断と指示を基本とすべきです」とした上で、そうは言っても人間は必ずしも理性的、科学的判断ができるわけではなく煩惱から生じる不安に死ぬまで苦しめられる。そんな弱い人間を阿弥陀の慈悲が救済してくれる、と説いている。近代医学がカバーできない領域において宗教の果たす役割があるというのである。

曹洞宗の鬼生田俊英宗務総長も、「お釈迦さまは、『病』・『死』という『苦』に向き合い、正しく見、正しく語り、正しく実践すべき事をお説きくださいました<sup>12)</sup>」と仏教徒のとるべき行動を示し、曹洞宗は明治時代から「加持祈祷の力を妄信して、医学的見地に基づく対応を妨害しないように促してきた<sup>13)</sup>」という歴史に触れて、今日においても「科学的根拠のない不正確な情報、迷信に

振り回されることなく、厚生労働省で提供される情報や、医学情報などに基づき、かかりつけ医などに相談しながら、冷静に生活を行っていく<sup>14)</sup>重要性を語っている。また鬼生田総長は宗祖・道元の「自未得度先度他」という言葉を引用して、他者への思いやりの心を忘れず、「布施」「愛語」「利行」「同事」の「四摂法」に従って冷静な行動を取るように求めている<sup>15)</sup>。

曹洞宗の鬼生田総長のように共生、利他の精神を説き、社会の亀裂を埋める相互扶助の実践を説く宗派は多い。感染者の差別を戒めるのは、真宗大谷派である。

「今第一にこころすべきことは、思いもよらず発病してしまった方々とその家族を孤立させないことです。それらの方々を排除する風潮が広まっていますが、このような時であるからこそ、『ともに悩み、共に苦しむ』という仏の智慧に学ぶ姿勢が求められています。ウイルスは排除しても、人間を排除しないという意志が重要です。<sup>16)</sup>」

さらに自分のためよりも他者のために行動するという利他の精神を、伝教大師・最澄の教えとして説いているのが天台宗の杜多道雄宗務総長である。

「今重要なのは利他の精神ではないでしょうか。伝教大師は、利他を実践する菩薩僧こそが護国の良将であり、国家の大災を防ぐ力を持つと述べられ、比叡山にて菩薩僧の養成に心血を注がれましたが、それは僧侶に限ったことではありません。国民一人ひとりが菩薩僧としての自覚を育み、利他の精神を持つことを願われました。」<sup>(17)</sup>

そして最も多くの宗派が共通して実践しているのは「祈り」であり、パンデミック犠牲者への弔いであろう。二〇二〇年三月神社本庁から発せられた「新型コロナウイルス感染症鎮静祈願祭の執行通知」に基づいて、全国の神社で、パンデミックの早期終息を願う神事が、行われている。東大寺は毎日パンデミックの終息、罹患者の早期回復、犠牲者を弔う「正午の祈り」を行っている。宗派を超えて宗教の力を結集しようと、他宗派にも呼びかけ、この趣旨に賛同する神道、キリスト教などの宗教者も祈りに加わっている。

罹患者や犠牲者家族の心のケアのための「祈り」「弔い」の重要性が見直され、「臨床宗教師」として「心のケア」に取り組み宗教者たちもいる。二〇二一年の東日本大震災を契機に、宗教者

と医療関係者が連携し、「心の相談室」が同年四月に発足した。二〇二一年一月には東北大学で「臨床宗教師」研修プログラムが設置され、二〇一八年に一般社団法人日本臨床宗教師会による「認定臨床宗教師」の資格制度が始まった。国学院大学神道文化学部黒崎浩行教授は、コロナ禍で人と会うことが制限される状況にある臨床宗教師の困難な状況を示しつつ、今後宗教が日本社会で果たすべき役割は増々大きくなると予想している。<sup>(18)</sup>

## 二 I Sのパンデミック天譴論、陰謀論

他方、イスラームは、新型コロナウイルスの出現をどう捉え、どのような対応をとるべきと説いているのか。

イスラーム世界における新型コロナウイルスをめぐる言説は、「原理主義的理解」「世俗主義的理解」「解釈主義的理解」の三つに大別することが可能であろう。

第一の「原理主義的理解」は、新型コロナウイルスは天罰、という見方をとる。「近代化によって世俗化が進み信仰を忘れた人間が増えるなかで、神が怒り、罰として新型コロナウイルスを現世にもたらした」というのである。天罰ならば人間はただただ悔い改め、祈り、神の怒りが鎮まるのを待つしかない。「新たな疫病の流行は、

世界の終わりの予兆である。このことはすでに聖典に記述されている。まもなく、善と悪の最終闘争が始まり、善が勝利する日は近い」という聖典に依拠する言説は、原理主義的である<sup>(19)</sup>。

第二は、新型ウイルスは自然災害と同じく、自然のメカニズムから発生したもので人間の信仰とは関係ないという政教分離、世俗主義的な見方である。イスラーム世界の少なからぬ政治指導者、行政担当者はイスラーム教徒であるが、政治・行政政策とイスラーム教義を分けて考える世俗主義的立場をとっている。

第三は、「人類が自らの手でこの災難を乗り越える能力を有することを証明する機会を、神は、与えてくださった。それゆえにこの危機を収束させるために、人間は理性と信仰の双方を総動員していかなければならない」という見方である。上述の原理主義者のように聖典を文字通り読むのではなく、科学・合理主義に適合するように解釈し、それによって科学と連携しながら、今回の危機を乗り越えるために、宗教が積極的に関わっていかうという立場である。

原理主義者は、「邪悪が支配する世界の終わりは近く、善と悪の対立が激化している」という終末認識を持ち、新型ウイルスを、善が最終的に勝利する終末の予兆と捉える。そしてパンデミックは神によってあらかじめ用意されていたものであり、それは神の

言葉として聖典に予言されていると主張し、聖典のなかに現在の状況に符号しそうな箇所を探し求める。

現在のパンデミックに関して「原理主義的理解」をとっている代表格が、IS（「イスラーム国」）である。米国の犯罪学者チェルシー・デーモンらは、二〇二〇年一月二〇日から同年四月一日までの期間、IS支持者間のテレグラム、ツイッター等のSNSで流れている四四二件の情報を分析した結果、「天譴論」と「陰謀論」が頻繁に議論される主要なテーマ、と分析している<sup>(20)</sup>。これによればISは、新型ウイルスを「神の怒り」「神の戦士」と呼び、パンデミックをISの敵である「無信仰者」「拒絶者」「背教者」に神が降した天罰、と理解している。ISの敵とは、ウイグル地域のイスラーム教徒を弾圧している中国政府、ISと敵対する米国あるいは西洋諸国、イスラエル、イスラーム教シーア派、シーア派を支援するイラン政府などである。

ISのプロバガンダは、クルアーン一三章四二節「不信心者は終末の住まいが誰のものであるかを問もなく知るだろう」を引用しながら、「十字軍諸国」（欧米）は、神の怒りが形となって現れたコロナウイルスによって、ISの味わった苦しみと同じ苦しみを経験していると述べている<sup>(21)</sup>。

中国において発生した新型コロナウイルスは、ウイグルのイス

ラーム教徒を弾圧する中国政府への天罰という議論が、イスラーム世界の一部において当初流れた。たとえば IS はその機関紙にクルアーン章句「本当にあなたの主の捕らえ方（懲罰）は強烈である」（八五章一二節）を掲げて、中国への天罰説を唱えていた。

しかし、感染がイスラーム諸国にも拡大すると、「陰謀論」も語られるようになり、IS のデジタル情報空間においても、陰謀論が登場するようになった。無信仰者、欧米諸国、シオニストが新型ウイルスを生物兵器として開発し、意図的に「イスラーム戦士」たちに広め、欧米の刑事施設に収容されている「IS の兄弟姉妹」を感染させようとしているというのである。さらに IS のデジタル空間では、欧米は新しいワクチン開発で巨額の利益を得ようとしている等の「ワクチン陰謀論」も多く流れている。<sup>(2)</sup>

### 三 パンデミック天譴論への反論と人類の連帯アピール

西洋近代とイスラーム教義の調和を追求してきたイスラーム知識人を、チャールズ・クルツマンは「リベラル・イスラーム」と呼び、リベラル・イスラームの方法論を「リベラルなイスラーム教義」「沈黙のイスラーム教義」「解釈するイスラーム教義」の三つに分類した。<sup>(3)</sup>

「リベラルなイスラーム教義」は、正しく理解すればイスラーム教義そのものが西洋リベラルと同じ人権・民主主義・合理主義等の基本価値観を共有しているという考え方である。第二の「沈黙のイスラーム教義」は、イスラーム教徒にとってクルアーンは、神の言葉として絶対の聖典であるが、そこで言及されていない事象（例えば今回のパンデミック、あるいはインターネット技術といった預言者ムハンマドの時代には存在しなかった事象）については人間自らが判断することを神は許しているという立場である。第三の「解釈するイスラーム教義」は、「クルアーンは神の言葉で神聖だが、それを解釈する主体の人間は誤りを犯す可能性を常に伴っている。誤読を避けるためには、様々な解釈を突き合わせ協議し、よりよい解釈を求める努力をしなければならない」と考える。この立場では、クルアーン解釈に複数の意見があるのは不可避であるのみならず、神の恩寵であり、民主的な話し合いが大切となる。

パンデミックをめぐる IS のような原理主義的理解に対する反論も、上記「リベラルなイスラーム教義」「沈黙のイスラーム教義」「解釈するイスラーム教義」のいずれかの立場から為される。インドネシアにおける二番目に大きな規模のイスラーム組織「ムハマディア」は、二〇二〇年三月二四日に宗教的見解（ファ



トワー）を発し、パンデミックとの戦いを宗教的義務ジハードと位置付けるとともに、「ウイルス禍は神の試練であつて天罰ではない」とISのパンデミック天譴論を否定した。これに先立って三月一九日にムハマディヤは金曜礼拝の説教（「フトバ」）を公開し、クルアーン章句（二章一五五節）「われは、恐れや飢え、とともに財産や生命、（あなたがたの労苦の）果実の損失で、必ずあなたがたを試みる。だが耐え忍ぶ者には吉報を伝えなさい」を引用している。

「解釈するイスラーム教義」の立場から、ムハマディヤは信者に対して困難を克服する人間の主体的な努力を説く。そして、フトバは、今回のウイルス危機に際して、イスラーム教徒がなすべきは三点あるとして、①神に対する信仰を深めよ、②社会的距離を保つことを実践し、金曜礼拝や宗教学習会などのモスクでの活動を抑制せよ、③支援を求める人々を救え、と述べ、締めくくりにクルアーン章句「むしろ正義と篤信のために助け合つて、信仰を深めなさい。罪と恨みのために助け合つてはならない」（五章二節）を掲げている。ISの原理主義的な天罰論・陰謀論をイスラーム教徒にとつての絶対の聖典に拠つて否定しているのである。インドネシアの隣国マレーシアの国際イスラーム大学教員ラムジ・ブンドウブカも、パンデミックに不安を募らせるイスラーム

教徒に対する悩みに答える形で人類が一丸となるとき、と説いている。<sup>(24)</sup>

彼の説明によれば、神は時として新しいタイプの疫病を世に送り出し、人間に試練を課してきた。今日の新型コロナウイルスは、全人類の健康、生存に関わる脅威である。これも神が人間に与えた試練であり、人間は持てる限りの力を發揮して問題解決にあたり、混乱が生じないように社会を管理していかねばならない。現在、政府、医療関係者、治安当局等が自分たちの命や家族を顧みず、感染防止のための努力を続けている。ラムジは、こうした関係者を「人種、宗教、政治的信念、社会経済状況の違いを超えて、人の命を救うために社会の各所で奮闘している」と称え、彼らに感謝の意を表する道は、彼らに協力し、社会が団結してことにあたること、と主張する。<sup>(25)</sup>

しかしながら、感染拡大に伴い、他者を傷つけようとする中傷、憎悪も拡散し、それによつて自己利益を得ようとする人間が出てきているとラムジは警告する。ISのようなパンデミック原理主義的解釈の青年層への拡がりに対する懸念が、マレーシア・イスラーム国際大学の教員であるラムジにはあるのであろう。パンデミック発生以前から、ISプロパガンダの東南アジアの大学キャンパスへの浸透を懸念する声があがっていた。

「我々は憎悪でなく連帯によって導かれねばならない。我々が直面する最大の敵はウイルスそれ自体ではなく、我々を反目へと向かわしめる憎悪そのものである」というWHOテドラス・アダノム事務局長の言葉を引用し、前述したクルアーン五章二節や以下のクルアーン章句（三章一〇三節）をひいて、団結・協力はイスラーム教徒にとって選択肢ではなく「義務」であるとラムジは言明している。<sup>26)</sup>

「あなたがたはアッラーの絆に皆でしつかりとすがり、分裂してはならない。

そしてあなたがたに対するアッラーの恩恵を心に銘じなさい。はじめあなたがたが（互いに）敵であった時  
かれはあなたがたの心を（愛情で）結び付け、その御恵みによりあなたがたは兄弟となったのである。」

#### 四 近代医学に協力するイスラーム言説

もう一点、ラムジの発言で注目しておきたいのは、アッラーの教えそのものが科学的・合理的なものであり、イスラーム教義と近代医学は反目しないという「リベラルなイスラーム教義」的考

え方である。神の教えが合理的であるがゆえに、パンデミック禍において神の教えに忠実たらんとするならば、新型ウイルスと闘っている医療専門家の助言やこれに基づく政府の規制に従うこと、とラムジは明言している。<sup>27)</sup> 政府、専門家の指示にしたがって外出を自粛し、自宅で仕事し、礼拝することが、神に対して人間の団結、連帯を示し、試練を乗り越える道、と、ラムジはイスラームと近代科学（医学）の共存を説いているのである。

イスラーム教徒のあいだで、より実践的なレベルで、イスラームと近代医学の連携を試みようという言説も見られる。オーストラリアのイスラーム文明研究者にして自らもイスラーム教徒であるメーメット・オザルプは、礼拝と生活が混然一体化したイスラームの伝統的な教義のなかに近代医学が説く衛生観念が含まれていることを以下のように説明する。

イスラーム教徒は、一人一人がとても自然な形で衛生観念を身につけていて、それがコロナウイルスの感染予防策となっている。保健機関、専門家は個々が衛生観念を持ち、行動することがウイルス感染を抑制する上で有効と考え、二〇秒の手洗い励行等を促している。イスラームは数世紀にわたる身の回りを清潔にすることを励行してきた。クルアーンは、

信徒に対して「あなたの衣を清潔に保ちなさい」（七四章四節）、「アッラーは純潔の者を愛される」（二章二二節）と説いて来た。

一四〇〇年以上もまえに、預言者ムハンマドは「清潔を保つことは、信仰の半分である」と語り、弟子たちに食事前、食事後の手洗い励行、最低週一回の沐浴、毎日の歯磨き、爪や各個人の大切な局部を清潔に保つように指示を与えている。<sup>28)</sup>

インドネシア最大のイスラーム組織「ナフダトゥル・ウラマー（NU）」の重鎮で同国イスラーム社会に大きな影響力を有するムストファ・ビスリ（愛称グス・ムス）も、二〇二〇年五月二六日付け自身のインスタグラムで「私はあなたを愛し、大切に思う。だから私はマスクをつける。マスク着用運動を展開しよう」と信者たち呼びかけた。

NU大学教員のムハンマド・イスホンはこのグス・ムスのメッセージを引用しつつ、医療専門家の忠告に従い外出時にマスクを着用するのはイスラーム法的義務であると主張し、以下のクルアーン章句を引用する。<sup>29)</sup>

「また秩序が定められた後、地上で悪を行ってはならない。

もしあなたがたが信者であるならば、これはあなたがたのために最も良いことである。」（七章八五節）

「またあなたがた自身を、殺し（たり害し）てはならない。」（四章二九節）

## 五 パンデミック危機における相互扶助と祈り

前節で触れた在オーストラリア、イスラーム研究者オザルプは、過剰な消費主義、浪費、人間による環境破壊に対する天罰として新型コロナウイルスが現れたと説く天譴論がイスラーム教徒のあいだで流れていることに言及する。天譴論はパンデミックに意味づけをすることで人々の不安を軽減し、パニックに陥ることを回避する一定の効能がある、とオザルプは天譴論の意義を認める。他方、天罰ゆえに何をしても無駄という運命論に人々を向かわせ、感染防止の努力を放棄させてしまう弊害がある。しかしウイルスの発生が人智を超えたものであっても、その感染抑止の成否は人間の努力次第である。「自分には神のご加護あるからラクダをつながらないのだ」という男に対して、預言者ムハンマドが「まずラクダをつなぎなさい。それから神に礼拝しなさい」と述べた故事を引き合いにだして、オザルプはパンデミック終息に向けた人間の努

力の必要性を説いている。

パンデミック終息は一人の力で成し遂げられない。他者との協力、助け合いが必要となる。苦境にある人に手を差し伸べる慈善、利他的行為は、イスラーム教徒にとって重要な宗教的義務としての信仰行為である。ザカート（宗教的義務としての寄進）やワクフ（財産寄付）というイスラーム共同体独特の制度を通じて、パンデミックによって苦境にある人に手を差し伸べるフィランソロピー活動や自らを顧みず他者を救おうという利他的活動が、活発化している。

「インドネシア・ウラマー（イスラーム指導者）協議会」（MU I）のアンワル・アッバース幹事は二〇二〇年四月にザカート制度を利用して、パンデミックで職を失い貧困に苦しんでいる隣人を救え、という呼びかけを行った。「近所の隣人が飢えているのを見過ごしたまま、十回メッカに巡礼に出かけたとしても、その人は良き信仰者とはいえない。自らを慈しむように他者を慈しみなさい」とアッバースは説き、パンデミックによる社会規制が拡大するなかで職を失うイスラーム教徒が続出しており、彼らを救うために最寄りのザカート受け入れ機関に申し出るよう呼びかけた。<sup>(21)</sup>

インドネシアにはザカートを管理する政府宗教省傘下の国家機

関として「国家喜捨庁」（B A Z N A S）が存在する。パンデミック下のインドネシアにおいて、あらためて扶助組織としての国家喜捨庁の社会的役割に注目が集まっている。ザカートを専門とする研究者たちは二〇二〇年三月に、国家喜捨庁に対して、パンデミック対応として、「国際ザカート協議会との連携による、イスラーム貧困国への喜捨強化」「インドネシア国内予防策としてマスクの無料配布、予防啓蒙活動への支援」「ワクチン開発のための研究支援」「ハラル・フードの健康面での効用広報」を強化するよう政策提言を行っている。<sup>(22)</sup>

政府機関のみならず国から独立したイスラーム組織も活発なフィランソロピー活動をおこなっている。日本と比較すると、これら宗教組織が福祉・医療・教育分野においてパンデミック対策上果たす役割ははるかに大きい。例えば前述のムハマディアは、二〇二〇年三月五日に新型コロナウイルス対策指令センターを立ち上げ、慈善活動・高等教育・初等中等教育・学生組織・女性組織・広報部局間を調整し、総合的な対応にあたっている。<sup>(23)</sup>三月二四日にはクルアーン五章三二節「人の命を救う者は、全人類の命を救ったのと同じである」という章句をひいて、イスラーム教徒に自発的な無償救援活動を推奨した。

巨大組織ムハマディアは、インドネシア全土に学校、病院、社

会福祉施設を有しており「ウイルスとの戦いはジハード」という本部指令に基づき、二〇のムハマディア附属病院が、新型コロナウイルス感染患者を受け入れ治療活動を行っている。

ムハマディアは「心のケア」の必要性についても、認識しており、新型コロナウイルス対策指令センターには「心理社会支援センター」を設け、社会に向けてカウンセリング・サービスを実施している。このセンターには、大学や研究機関から志願した六〇人の心理学者ボランティアが待機し、SNSを通じて寄せられた相談に応じている。<sup>(34)</sup>

非常事態にあつて「祈り」の重要性をあらためて説いたのが、前述のムストファ・ビスリである。世界最大のイスラーム組織ナフダトウル・ウラマーが発信するオンライン・メディア「NUオンライン」(三月一六日付け)は、リベラル・寛容派の総帥ムストファ・ビスリからのメッセージを伝えている。インドネシアで本格的な感染拡大が始まっていた時期に政府や医療関係者による様々な取り組みが行われていたが、「忘れてはいけないのが、信仰のしもべとして、ウイルスも含めてすべてを司る神への祈りとともに、精神を高みに置こうとする霊的な努力」と述べている。

ムストファ・ビスリは、宗教と近代科学文明の最先端である医療は、未知のウイルスと戦うための車の両輪と捉えており、心の

領域においては信仰が免疫力を高める有効な手段と考えていた。信者たちに対して、礼拝前の「身体の清め(wudu)」を完璧なものとしてせよ」と公衆衛生の理にかなった指示を与え、続けて世界の安寧を祈るハディース(宗祖ムハンマドの言行)の一節を繰りかえし唱えることで、祈りに集中し、心が乱されることないよう訴えている。<sup>(35)</sup>

## まとめ

このように俯瞰してみると、日本の宗教とは全く異なる宗教と考えられているイスラーム教だが、新型コロナウイルスの出現について、「天譴論」「人類の団結」といった似通った言説が語られている。パンデミックへの対応を宗教がどう説いているかという点にはについても、「近代医学との共存」「相互扶助」「祈りへの集中」といったメッセージが、イスラームでも宗教指導者から信者に対して打ち出されている。

危機的な状況について、一部「天譴論」を語る宗派もあるが、主流派は「天譴論」を「人間の努力を無視し運命論に陥らせる」、あるいは「他者への憎悪を募らせ人類の団結を乱すもの」として否定している。

近代化、グローバル化が進行する世界では、宗教は公的空間から私的空間へと限定されてゆき、社会的影響力を弱めていくと考えられてきたが、イスラーム世界では一九七〇年代からむしろ「イスラーム再活性化」と呼ばれる現象が起きていた。今回のパンデミックにおいても、あらためてイスラームが持つ社会的役割が認識され、危機を乗り越えていくために、いかにその機能を最大限に発揮させるか議論が交わされている。

イスラーム圏に比して、日本ではパンデミック危機下の宗教の役割をめぐる議論は低調で、作家の五木寛之は日本では古来危機の時代に人々がする先であった宗教が社会のニーズに応えられおらず、「仏教の教えから危機の時代の生き方を説いた親鸞、日蓮、道元のような」宗教者の声はきこえてきません<sup>(36)</sup>。「コロナに際して緊急事態宣言下に拝観を禁止、門戸を閉じた寺も多くありました<sup>(37)</sup>」と宗教の沈滞を嘆じている。

とはいえ五木は、人は感染予防と経済だけに生きるにあらず、として現代人の精神には新型ウイルスから身を守る「心の抗体」が必要と主張する。宗教の無力を嘆きつつ、宗教的な感性を研ぎ澄ます重要性を語っているのである。冒頭で紹介した山崎正和の「近代前の歴史への復帰」と共鳴する議論といえよう。

アジアのイスラーム圏や仏教圏における宗教活性化・社会関与

の趨勢に刺激を受けて、「エコロジーの観点からの古神道再評価」「行動する仏教」「地域に開かれた寺」「臨床宗教師」といった現状打破の試みが、日本の宗教界でも見られる。こうした模索からポスト・コロナ時代の新しい生き方について説得的な提案が打ち出されるならば、短期的にはパンデミック不況で淘汰される寺社の数は少なくないであろうが、長期的には日本においても宗教が復権してくる可能性は充分ある、と考えられる。

注

- (1) World Economic Forum, "COVID-19 Risks Outlook: A Preliminary Mapping and its Implications," *The World Economic Forum*, May 2020. <https://www.weforum.org/reports/covid-19-risks-outlook-a-preliminary-mapping-and-its-implications#economic-risks-top-the-charts> (二〇二〇年一〇月一日アクセス)。
- (2) 国連広報センター「アントニオ・グテレス国連事務総長ビデオ・メッセージ：私たちは皆同じ仲間：人権とCOVID19の対応、そして復興」(二〇二〇年四月) [https://www.unicef.jp/news\\_press/messages\\_speeches/sg/37324/](https://www.unicef.jp/news_press/messages_speeches/sg/37324/) (二〇二〇年一〇月一日アクセス)。
- (3) UNESCO, "COVID-19 Impact on Education." <https://en.unesco.org/covid-19/educationresponse> (二〇二〇年十二月一日アクセス)。
- (4) 山崎正和「二一世紀の感染症と文明：近代を襲う見えない災禍と日本人が養ってきた公德心」、『中央公論』、二〇二〇年七月号、一二二頁。
- (5) 同上、二九頁。

- (6) 同上。
- (7) 藤山みどり「新型コロナウイルスに対して宗教界はどう対処せよと説いたか？」宗教情報センター『研究員レポート』二〇二〇年五月十七日、<https://www.circam.jp/reports/02/detail?id=8111>（二〇二〇年一月一日アクセス）。
- (8) 同上。
- (9) 日蓮宗「新型コロナウイルスに関する声明文『命を護ることは、心を護り強く生きる力を得ること』」二〇二〇年四月十七日、<https://www.richiren.or.jp/information/statement/20200417-4688/>（二〇二〇年一月一日アクセス）。
- (10) 臨濟宗妙心寺派大本山妙心寺「管長猥下のおことば『新型コロナウイルス感染症に対するおことば』」<https://www.mnyoshinj.or.jp/1137/1139>（二〇二〇年一月一日アクセス）。
- (11) 浄土真宗本願寺派「新型コロナウイルスの感染拡大に伴うすべての人へのメッセージポスター」<https://www.hongwanji.or.jp/news/cat5/000816.html>（二〇二〇年一月一日アクセス）。
- (12) 曹洞宗「総長談話（新型コロナウイルス感染症 感染拡大防止にあたり）」二〇二〇年四月二十八日 [https://www.sotozen-net.or.jp/stunmucyo/20200428\\_22.html](https://www.sotozen-net.or.jp/stunmucyo/20200428_22.html)（二〇二〇年一月一日アクセス）。
- (13) 同上。
- (14) 同上。
- (15) 同上。
- (16) 真宗大谷派「宗務総長からのメッセージかけられた願いに立ち返る〜人間性回復の道への出発点」二〇二〇年三月十三日 <http://www.higashinonganji.or.jp/news/info/34576/>（二〇二〇年一月一日アクセス）。
- (17) 天台宗「新型コロナウイルス感染拡大に関する声明」二〇二〇年四月十七日 <http://www.tendai.or.jp/oshirase/?covid19>（二〇二〇年一月一日アクセス）。
- (18) 國學院大學國學院大學メディア「東日本大震災を踏まえて見えてきた、アフターコロナにおける宗教者の役割とは」『新しい世界』を生きるための知』二〇二〇年八月十七日 <https://www.kokugakuhina.jp/article/186560>（二〇二〇年一月一日アクセス）。
- 今では武蔵野大学、上智大学、高野山大学、愛知学院大学、大正大学、龍谷大学などで認定臨床宗教師の育成が行われている。
- (19) 世界各地の宗教復興現象を分析する共同研究を行ったシカゴ大学「原理主義」研究プロジェクトにおいてアーモンドらは、「原理主義」のイデオロギー的特質として、「近代化による宗教危機に対する反応」「選択的な教義の構築」「善悪二元論的な世界観」「聖典の「無謬性の主張」「終末論的世界認識と救世思想」をあげている。G. A. Almond, E. Sivan & R. Appleby, "Fundamentalism: Genus and Species." in Martin Mary et al ed., *Fundamentalisms Comprehended* (Chicago, The University of Chicago Press, 1995), pp.405-407.
- (20) Chelsea Daymon & Meili Criezis, "Pandemic Narratives: Pro-Islamic State Media and the Coronavirus." *CTS Sentinel*, Vol.18, No.6 June 2020, pp.26-27. <https://www.ctcsma.edu/wp-content/uploads/2020/06/CTS-SENTINEL-062020.pdf>（二〇二〇年一月一日アクセス）。
- (21) *Ibid.*, pp.29-30.
- (22) *Ibid.*, pp.28-29.
- なお新型コロナウイルスワクチン製造過程がイスラームの禁忌に触れる、としてワクチン接種を拒絶する「反ワクチン」運動がイスラーム世界に存在する。サウジアラビアやマレーシア等ではイスラーム教徒が安心して接種を受けられる「ナラル・ワクチン」の開発が進められている。
- (23) Charles Kurzman, *Liberal Islam: A Sourcebooks* (Oxford, New York, Oxford University Press, 1998), pp.1-18.
- (24) Ramzi Bendebka, "The Importance of Cooperation and Unity in Islam."

- The Case of Covid-19." *Emotional & Psychological Support UTM*. <https://aigship.ium.edu.my/eps/the-importance-of-cooperation-and-unity-in-islam-the-case-of-covid-19/> (110110年10月11日アクセス)
- (25) *Ibid.*
- (26) *Ibid.*
- (27) *Ibid.*
- (28) Mehmet Ozalp, "How coronavirus challenges Muslims' faith and changes their lives." *The Conversation*, April 2 2020. <https://theconversation.com/how-coronavirus-challenges-muslims-faith-and-changes-their-lives-133925> (110110年10月11日アクセス)
- (29) Muhammad Ishom, "Hukum Wajib Memakai Masker dan Seruan Gerakan Moral Gus Mus." NU online, July 17 2020. <https://www.nu.or.id/post/read/121602/hukum-wajib-memakai-masker-dan-seruan-gerakan-moral-gus-mus> (110110年10月11日アクセス)
- (30) 「喜捨」(サカート)は、「信仰告白」「礼拝」「断食」「巡礼」とともに「五行」と呼ばれ、イスラーム教徒にとって義務として宗教行為であり、これを実践しなごうは宗教上の罪とされる。
- (31) Francisca C. Rosana, "MUI Kaji Percepatan Penyaluran Zakat Fitrah untuk Penanganan Corona." *Tempo Com*, April 1 2020. [https://bisnis.temppoco/read/1326425/mui-kaji-percepatan-penyaluran-zakat-fitrah-untuk-penanganan-an-corona](https://bisnis.temppoco/read/1326425/mui-kaji-percepatan-penyaluran-zakat-fitrah-untuk-penanganan-corona) (110110年10月11日アクセス)
- (32) Ali Chamani Al Anshory et al., "Policy Brief: The Role of Zakat Institution in Preventing COVID-19." *BAZNAS Pusat Kajian Strategis*, March 2020. [https://drive.google.com/file/d/1G5F6EGw7Ujnz\\_4j94BSGUS2d78Vv5lF/view](https://drive.google.com/file/d/1G5F6EGw7Ujnz_4j94BSGUS2d78Vv5lF/view) (110110年10月11日アクセス)
- (33) "MCCC and Its Commitment to Flatten the Curve." *Syara Muhammadiyah*, April 20 2020. <https://www.surarahammadiyah.id/2020/04/20/mccc-and-its-commitment-to-flatten-the-curve/> (110110年10月11日アクセス)
- (34) *Ibid.*
- (35) Muhammad Faizin, "Hadapi Virus Corona, Gus Mus Berikan Sejumlah Amalan dan Doa." NU online, March 16 2020. <https://www.nu.or.id/post/read/117872/hadapi-virus-corona-gus-mus-berikan-sejumlah-amalan-dan-doa> (110110年10月11日アクセス)
- (36) 五木寛之『「見えない不安」に『心の抗体』を』『文藝春秋』第九八巻10号、110110年10月、二二六頁。
- (37) 同上、二二七頁。